

私は今、柏崎刈羽原発から約9kmの自宅で、高齢の母と妻の3人で暮らしています。地域社会の人々と共に濃密で、満たされた日常生活を送っています。

中越沖大震災、2007年7月16日発災。この地震による被害と苦戦しながら、テレビの画面から流れてくる、東京電力柏崎刈羽原発3号機の火災と黒煙を見て、震撼させられました。原発のオンサイトで何が起きているのかはわからず、何か起きているのではないかという不安だけは募ります。やがて味気のない報道で次第に原発構内の様子が分かるようになってきました。原発における地震の被害は、放射能漏れ、火災、クレーンの破損など多岐にわたり、長期の稼働停止に至りました。2号機は自動停止せず、翌日になってやっと停止したことも後で知りました。それでも私は日常生活を取り戻してゆく中、しだいに自分の中に、柏崎刈羽原発との共存もしょうがないかという思いにすっぱり収まってゆくことに気がつくこととなります。この地震ですべてが揺れました。そして、心も揺れていました。私たち柏崎市民は柏崎刈羽原発の再稼働をめぐり、いっそう心を揺らしております。

その4年後、冬もそろそろ終わろうという3月11日、巨大地震が東北地方に襲来します。東京電力福島第1原子力発電所が爆発するその瞬間を見てしまいました。これは全世界が体験したことになります。この時点で私の考え方が一変します。あの原発事故がなければから、あの原発さえなければに。およそ安全性の裏付けのない技術に、予測不可能な災害が加わると、大惨事になるということがよくわかりました。原発事故におけるレベル7という最悪の原発事故で、私が発言している今なお、毎時1千万ベクレルを超える高い放射能を、放出し続けています。原子力発電所は本来、大量の水でコントロールされて、プラントが機能するはずが今、その大量の水でのたうっているではないか。原発事故は今や、取り返しのつかない、後始末のできないことになっているのではないですか。さらにもっと悩ましい問題があります。東京電力福島第一原子力発電所の事故を目の当たりに見て、「使用済み核燃料」という言葉を毎日のように聞かされました。猛毒の大量の「死の灰」の塊ことを言っているのです。このことに対しては今日に至るも何の手も打たれてはいないのではないのでしょうか。原発は「トイレなきマンション」と言われ続けている理由がここにあるということではないのでしょうか。

国策は国民に対しては秘密から始まるとも言われます。危険が大きくて秘密厳守を徹底せねばならない事業が、情報開示と説明責任が求められる民主主義社会において存在し得るのか問い続けようと思います。

どの世論調査を見ても国民の過半数は原発の存在を許してはいません。響き合うものがあります。この国民の声はただ単に原発の存在を許していないだけでなく、原子力発電という一つの産業が今や名誉ある事業ではないと言う確信に立っているからではないのでしょうか。

私は10万年後の安全を求めて意見陳述しているわけではありません。たった今の安全を求めているのです。どうか力をお貸しください。 終わります。